

第 79 回身心変容技法研究会 2021 年 5 月 29 日 (土) 13 時～17 時 Zoom

和歌と身心変容

津城寛文・日守麟伍

1 和歌の宗教学——宗教研究と日本研究の接点で

1-1 身心変容 — 日常が溶解 (融けかかる) → 究極との融合 (融け合う)

1-1-1 意識変容 — 意識融合 → 遍在意識

1-1-2 時間変容 — 時間融合 → 永遠の時

1-1-3 空間変容 — 空間 (身体) 融合 → 遍在 (妙有、真空)

日常 / / / / 究極の手前 penultimate (ヒックの愛用) / 究極 ultimate
精神衛生上、感情教育としての～～霊操～～??

☞ 「宗教・スピリチュアリティの諸合法 (則) 性のからみ合い」『身心変容技法研究』5
「身心変容における陶酔と覚醒」『身心変容技法研究』8
『社会的宗教と他界的宗教のあいだ』世界思想社、2011 (序章、終章)

1-2 日本文化の初期条件、選択的親和性、到達地点

1-2-1 深層文化

1-2-2 原風景

1-2-3 叙景詩

1-2-4 雰囲気 (アトモスケープ) の景観

1-2-5 頂点文化

☞ 「日本オリジナルの人文社会系キーワード」『国際日本研究紀要』8 (つくばリポジトリ)

1-3 日本の頂点文化——ミニマリズムの達成

1-3-1 茶道

1-3-2 能

1-3-3 武士道

1-3-4 神道

1-3-5 和歌

1-3-6 表現の零度

☞ 「日本の頂点文化」『国際日本研究紀要』12 (つくばリポジトリ)

1-4 和歌の宗教学——2つのポリティックスと2つのメディテーション

1-4-1 和歌のポリティックス(1)——文化資本としての和歌

1-4-2 同(2)——和歌の呪力

1-4-3 和歌のメディテーション(1)——仏教的真理実践

1-4-4 同(2)——自然観照

1-4-5 和歌の詩学プロパー——類似と差異

1-5 歌詠みの自省(未定稿「頂点文化と癒し」)

1-5-1 個人史的な詩学「何をどう歌っているか？」

1-5-1-1 死者、不在の者(言葉で返ってこない)に歌いかける
モノローグ(←→対話)、共有、共感
自然詩、自然観照、叙景詩(←→人事)

1-5-1-2 膨張的/収縮的、動物的/植物的、
近景・遠景、揺らぎと陶酔、志向的/無志向的(融合)
自然に接近・接触/望遠、細部に集中、ロックオン

1-5-1-3 生きられた時間、生きられた空間、瞬間の複合(E・パウンド)

1-5-2 和歌の様式、歌人の共同体「なぜ和歌なのか？」

情けある 昔の人は あはれにて 見ぬ我が友と 思はるるかな(伏見院御製)
風の音に 秋の夜深く 寝覚めして 見果てぬ夢の 名残をぞ思う(平忠度)

秘密の友愛団体、服喪者たちの団体(ミュラー)(ミュラー 2003:191)

観想家たちの共同体「サンガ」(ウィルバー)(津城、2011:26)

☞ 「和歌の宗教学」『媒介物の宗教史』リトン

「折口鎮魂説からアトモスケープ論へ」『現代思想』42-7、2014

「アトモスケープ論・序説」『身心変容技法研究』7

『深層文化から頂点文化まで』アマゾンキンドル、2022 予定

2 日守麟伍自作自注

2-1 恋歌(相聞歌←→片恋歌)

2-1-1 「あくがる」、脱魂

妹や聞く 我が恋ひをれば 言霊の 響きは繁し 憧るるほど
日々を経て 相見る妹が おもざしに 憧れ出づる 魂留め得ず

2-1-2 「霊合たまあひ」、共感・共有

魂触れて 心驚き 見上ぐれば 妹がまなこに 見入られてあり
よし我れら 身は遠近に 隔つとも 霊合ふ幸を 重ね行かまし
憧るる 心互に 魂合ふは 定めなるべし 成り行くままに

2-2 叙景歌

2-2-1 音—風、水、虫、鳥、雨の

音もなき 霊家に注ぐ 花の風 夢の名残を 弔ふが如
うす曇る 夏の名残を 惜しむがに 蝉しぐれ満つ 森のかなしき

2-2-2 水、雨

夜の雨の 止みゆく音を 数えつつ 寝覚めも知らぬ しじまや深き
霧雨に かすむ木立や 下生えの 土に吸はるる 著き水音
せせらぎの 耳際に鳴る 冬去りて 水のぬるむや 風のゆるむや
ひた寄する 頻波のむた 入日影 島間にゆるる 塩満の浜



2-2-3 風

ためらひつ 振り返る身に ゆるき風の 波とや当たる 砂とやくずるる
木漏れ日の 斑に映ゆる 下生えに 名残の風の 懐かしき夏

2-2-4 森

芽ぐむ木に 赤らむ森の 薄青き 空に吹くらむ 風のためいき
これもかも 夢の如くに 思はるる 虫鳴き満つる 森にありても

2-2-5 夢

醒め際の 夢に潤ふ 人も花も 目覚めもはてに 影薄れゆく
水漬くほど 深き夢より 浮かび来て 音なき閨の 闇に息づく

2-2-6 道行

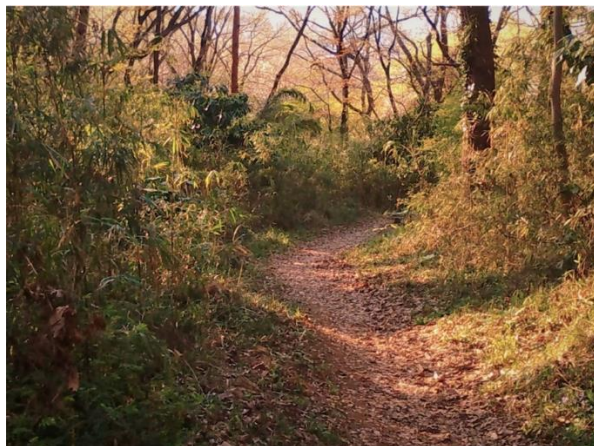
この雨を 限りと思ふ 道行に 途絶えも果てず ひぐらしの鳴く
夕風に 吹かれてゆらぐ 夏草の 音柔かき 道にくつろぐ

2-2-7 揺らぎと陶醉

磯にゆらぐ 影とりどりに 定めなく 寄りては散らふ 青き幻
夕映えの かがよふ壁に 垂れてゆらぐ 花陰の濃く 音のひそめく
玉石の 葉しげき萩に 埋もれて 照り陰る陽に 浮きては沈み
早風に 飛び行く雲の めくるめく 日影を揺らす 天地の底

2-2-8 古人との交流

この道に 倒れし人の 幾人や 花を手向けに 夢愛しむ
このときに 咲くやこの花 赤き房の いまさぬ人の み印のごとく
古の 言霊なれや (歌人なれや) 綾歌の 揺らく葉風と 降りかかりくる



2-2-9 父母を送る

亡き人を 遠く訪なふ 蝉しぐれの 音の満ち干を とともに聞く夏
したはしき 人の手を取り あたたかき 夢より覚めて 名残の惜しき

2-3 京極派との親和性——京極為兼、伏見帝その他

夜の雨の 音にたぐへる 君なれや 降りしまされば 我が恋ひまさる (伏見帝御製)
降る雨に しとどものこそ 思はるれ 人の恋しき 晴れもやらずて (麟伍)

そなたより 吹きくる風ぞ なつかしき 妹がたもとに 降れやしぬらん (清輔朝臣)
この庭に 吹きゆく風も 咲く花も 幸に満てるは 妹ありてこそ (麟伍)

響きくる 松のうれより 吹きおちて 草に声やむ 山の下風 (伏見帝御製)
夏草の ひそまる森に 遠き音の 葉風を透きて 注ぎささめく (麟伍)

枝にもる 朝日の影の 少なさに 涼しさふかき 竹のおくかな (為兼)
地に沿ひて 木立を漏るる 朝の陽の 白き肌に 浮きてかげらふ (麟伍)
下生えに さし入る光 花陰の 奥処に浮かぶ 黄金の淡き (麟伍)

沈み果つる 入日のきはに あらはれぬ 霞める山の なほ奥の峰 (為兼)
むれ鳥の 川面をわたり 離る辺に 雲の透く間ゆ こがね日の蒸す (麟伍)

- ☞ 『古語短歌——日本の頂点文化』アマゾンキンドル版、提携 ODP 版、2019
『くりぶとむねじあ和歌集——言霊の森』アマゾンキンドル版、提携 ODP 版、2019
「日守麟伍の和歌（うた）日記」<https://blog.goo.ne.jp/himori-ringo>

3 付録 近刊単著目次 近代スピリチュアリズム／日本文化

3-1

『死者とのコミュニケーション——無きものとされた近代知』
(アマゾンキンドル版、提携 ODP 版、2021~2022)

序章、無きものとされた近代知——心霊研究の諸事実と諸説明

I 部、周辺問題

- 1 章、スピリチュアリティ特区としての近代スピリチュアリズム
- 2 章、ロバート・オーウェン『自伝』の未邦訳部分
- 3 章、伝統宗教と近代スピリチュアリズムの思い描く「死後世界」

II 部、核心問題

- 4 章、マイヤーズ事件——2つの世界にまたがる実験
- 5 章、死者の「センター」——ジェイムズが今にも言おうとしたこと
- 6 章、社会と他界をつなぐ「世界システム」モデル

III 部、関連問題

- 7 章、非常事が増幅する合法性の問題——「死者の幻影」再考
- 8 章、善い社会のビジョン——ユートピア社会主義と近代スピリチュアリズムのあいだ
- 9 章、身心変容における陶酔と覚醒

終章、死者とのコミュニケーション——透過される生者の結界

3-2

『深層文化から頂点文化まで——日本研究へのいざない』

(アマゾンキンドル版、提携 ODP 版、2021~2022)

I 部 日本語の刷新

1 章 翻論の諸次元

2 章、日本語の戦略——非対称から対称へ、分離から混交へ

3 章 日本オリジナルの人文社会系キーワード

1 原風景

2 叙景詩

3 雰囲気の景観（アトモスケープ）

4 深層文化

5 頂点文化

II 部 日本文化の発信

4 章 日本の頂点文化

1 能

2 茶道

3 武士道

4 神道

5 和歌

5 章、和歌の宗教学——2つのポリティックスと2つのメディテーション

6 章、アトモスケープ論

終章 頂点文化と癒し